

宮川の現状と課題 補足説明資料

平成27年3月19日

現状と課題に関する補足説明

- 洪水をコントロールするという考え方は入っているようであるが、水以外の自然環境を保全する考え方もあると考えてよい。整備計画では当然環境や利用について考慮する。雲出川も含め広い範囲を一斉に掘削すると均一化となり、自然環境にとって良くないので、多様な生息地が残るように配慮してほしい。

- ・宮川本川では、河川整備計画において河道掘削の予定はない。
- ・広葉樹からなる河畔林、瀬淵のある流れやワンド・たまりといった緩流域環境、砂礫河原、河口部の干潟や塩性湿地といった、多様な動植物の生息・生育・繁殖環境について、経過監視により環境の変化を把握し、その保全を図っていく。

宮川下流部

■自然環境

- 地形変化や生物の利用状況等について定期的にモニタリングを行い、下流部にある連続する瀬淵（アユ等の産卵場となる瀬）、砂礫河原、河道内樹林、ワンド・たまり環境の保全を図る。
- タナゴ類が生息・繁殖しているワンド・たまりについて、定期的なモニタリングによる継続的な監視を行い保全・再生を図る。
- アユ等が支障なく移動できるよう、縦断的に連続した環境の維持を図っていく。
- 外来種について、定期的なモニタリングによる継続的な監視を行っていく。



砂礫河原



たまり



瀬

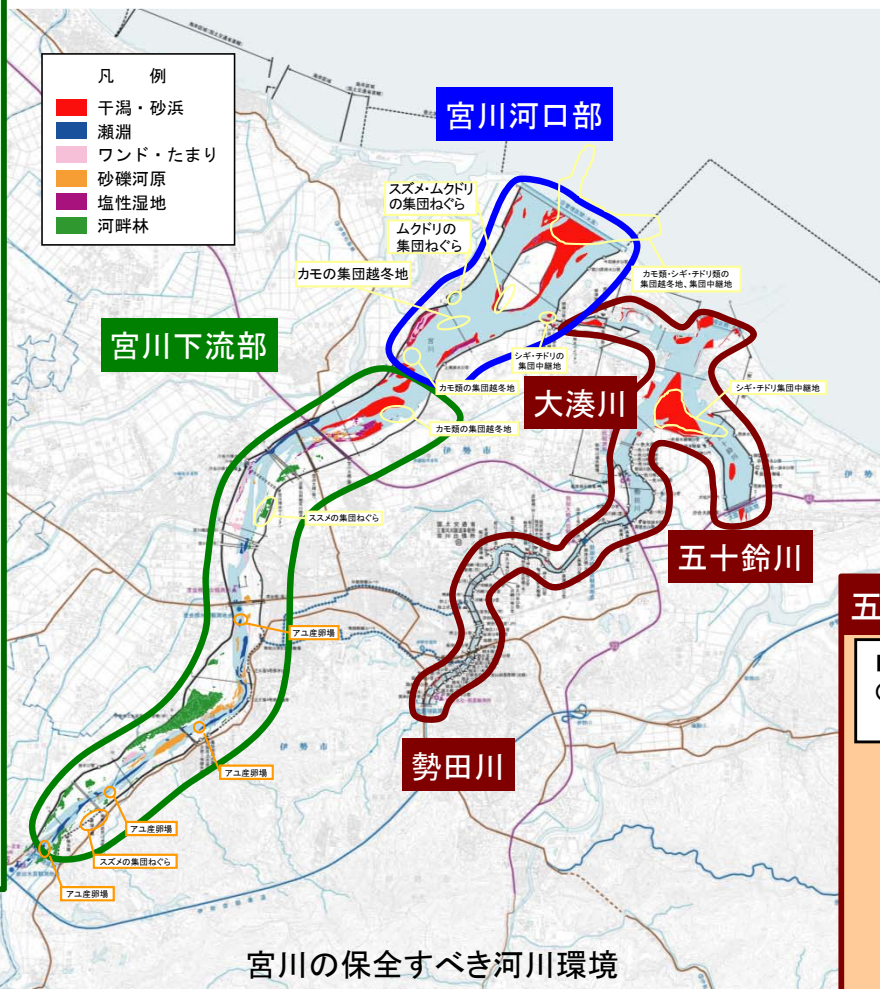


河畔林(ムクノキ・エノキ群集)



宮川下流部

宮川河口部



宮川の保全すべき河川環境

宮川河口部

■自然環境

- 地形変化や生物の利用状況等について定期的にモニタリングを行い、河口部にある干潟・塩性湿地の保全を図る。



0.0~2.0km



シロチドリ



1.0~3.0km



ヨシ群落

五十鈴川・勢田川・大湊川

■自然環境

- 地形変化や生物の利用状況等について定期的にモニタリングを行い、河口部にある干潟の保全を図る。

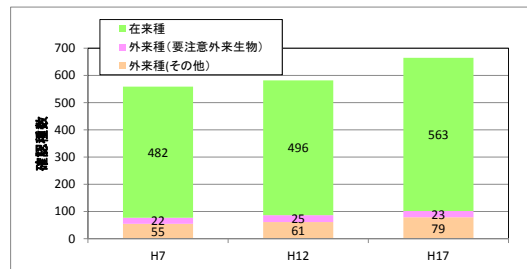


五十鈴川河口部の干潟

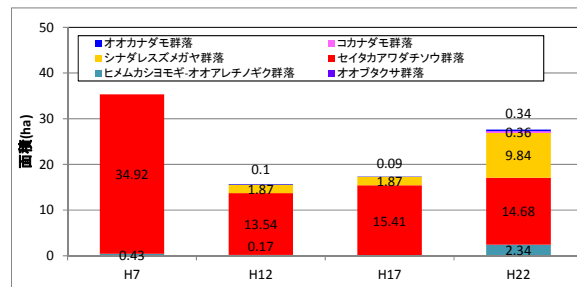
現状と課題に関する補足説明

- 宮川だけに限ったことではないが、植物についても外来種に対する対応を検討すべきではないか。
- 河道掘削後の裸地に外来の植物が侵入しやすいので、改修の際に外来種を除き在来種に配慮した整備をお願いしたい。外来種の現状把握や在来種の配慮事項検討をする上で河川水辺の国勢調査結果を活用してほしい。

- ・宮川で確認されている植物の外来種は年々増加しており、河川水辺の国勢調査では平成17年には102種が確認されている。このうち、要注意外来生物に指定されている種として23種が確認されている。
- ・要注意外来生物のうち、群落を形成しているのは6種であり、セイタカアワダチソウ群落とシナダレスズメガヤ群落の面積が大きい。
- ・平成7年以降の外来植物群落の変遷を見ると、洪水がないと一時的に拡大しているが、大規模な洪水が発生すると流出している傾向がみられる。シナダレスズメガヤも河道掘削箇所で増加したが、平成23年洪水により流失している。
- ・宮川では、河川整備計画において河道掘削の予定はないことから、今後は外来植物群落の変化について定期的なモニタリングにより継続的に把握・監視していく。



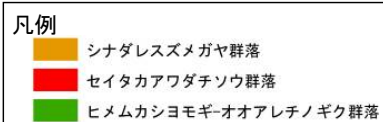
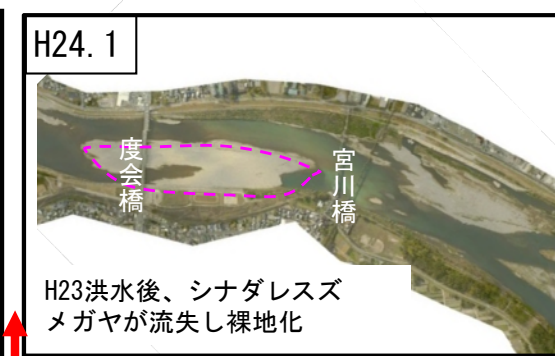
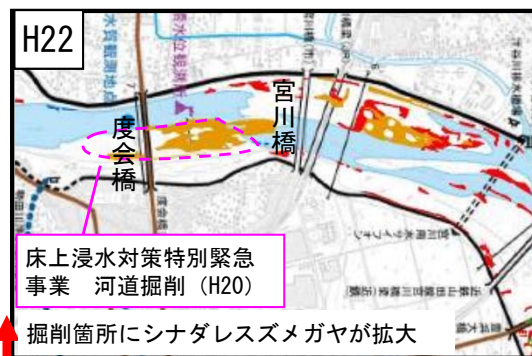
宮川における植物外来種の確認状況
(河川水辺の国勢調査による)



宮川における要注意外来植物群落の面積変化
(河川水辺の国勢調査による)



シナダレスズメガヤ群落
(宮川5.7k左岸; H22.10撮影)



H9. 7 洪水
(約5, 700m³/s)

H16. 9 台風21号
(約7, 200m³/s)

H23. 9 台風12号
(約8, 200m³/s)

宮川4～7k 外来植物群落の経年変化(河川水辺の国勢調査による)